

いつかー ねずみがー 五升樽さげでえ  
裏の細道 ちょろちょろと

向い<sup>かんま</sup>山の柴栗がー えんでこぼれて拾われてー  
あしたの茶の子に んまかんべー  
んまかんべー <sup>(う)</sup>茶の子 (三時のお茶飲みの菓子)

## (8) <sup>あずき</sup> <sup>ば</sup>小豆の化け虫

ざっと昔、国がととも、乱れっちまって百姓はがどうにもなんねったって、ある時道のよせ<sup>よせ</sup> (かたわら) で仕事したんだってない。「きょうは殿さまが通るんだってナ、道のよせで仕事してでみべえ」って、小豆畑で畑をうなって (耕して) いたんだって。ことしは何も穫<sup>と</sup>んにえ<sup>がしどし</sup> 飢饉年でない食う物が無<sup>ね</sup>もんだから、殿さまは百姓が一生けんめい働いでとこさ小麦まんじゅうを、ぼだっぼだっど落としていったんだって、百姓にない、殿さまが食べらしてくって (食べさせたいと思って) ずっーと落としてったんだない。ほだけども、まんじゅうってこと知らねもんだがら、「おかしえな、足も無<sup>ね</sup>え、口も無<sup>ね</sup>えものが落ちてる」つって、<sup>(不思議だ)</sup> 鋏<sup>くわ</sup>もってきてこう切ってみたんだって、したら小豆<sup>あずき</sup> いっぱい入ってるんで、「これ、このちきしょうだ、これ、小豆みんな食<sup>にく</sup>っちゃったのは、ほんで憎<sup>にく</sup>らしがらこの虫皆殺しちまうべ」つって、百姓たちはみなしてまんじゅうを切って殺しちまったって、小豆みな食われちまったんで、ごせやけたん (腹が立った) だべない。

## (9) <sup>かえる</sup> 蛙の恩かえし

昔<sup>ざっと</sup>、追原<sup>おいはら</sup>の入りの (奥の) 鎮守様に、ある父<sup>と</sup>つつあんがお詣りにいったんだない、そしたら蛇がでかい (大きい) 蛙を呑んでだんだって、

「あら、可愛いそうだから救ってやんべ」と思って、したが (だが) どうしたらその蛇がら蛙を離させだらいかと思て考えてがら「蛇よ、その蛙を離してくんにィが、おれの娘を呉れがら」って言ったら、蛇が蛙を離しちゃったんだってない、だが家さ来て娘が嫌<sup>や</sup>だっいたら (言ったら) 大変だと思て、病気になっちゃったんだうんだない。したら娘たちが、「父<sup>と</sup>うちゃん、なにして寝てんだ」って言<sup>ゆ</sup>ったがら、「俺<sup>お</sup>が言<sup>ゆ</sup>うごど誰でもええがら聞いてくんにが」ってゆったら、「お父<sup>と</sup>つつあんのごどだらなんでも聞いてやっぺ」ってゆったので、「んじゃら (それなら) 誰が蛇んどこに嫁さ行ってくんにいが (くれないか)」ってゆったら、「蛇んどこさなんか行ってらんに」ちゅうわけ、だが三人ある中一番ばち (末娘) が出て、「蛇んどこさ行ってやっぺって、じゃら針千本とふくべ (瓢箪) 千揃えて箱さ入ちくんちえ」ってゆったんだって。したら蛇が立派な男になって迎えに来たんだって、ほんで、誰も居ねんだがらその箱背負ってもらえてって、その箱ない。で、家でも父<sup>と</sup>ちゃんがついで行ったんだって、どこまでどこまで行ったら大した山ん中へ行っちゃって父<sup>と</sup>うちゃんここが帰って貰うでえって、「ほんじゃら俺は帰っから」って家さ帰ったんだって、そしている中に娘が蛇に、「この箱、池の中さ入ちんくちえ、おめの入ってくどこさ入ちくんちえ」って。したら、「そんなごとわけねえ」どなって、ずっーとして入れちやんだって、はじまりはよう、ええあんばいの男なって一しょうけんめ運んだって、しまいこんだはあ、<sup>ほんね</sup> 本音あらわしちあって蛇の姿で穴へつっこみ穴へつっこみしたって、ほら、針は口の中へ入ちやったべし、ふくべはなんぼ突ったってきたって浮きちまうべ、なんぼもなんぼもやってる中につかれではあそこで死んじまったつうんだ。

はあ、家さ着いたのは晩方になっちゃって暗くなってない、したら